とである」といわれるが、この呼びかけは啄木の問題に限らない。著者のこの呼びかけは本書の特色として、どの論考もすべて読者に訴えてくるものが多い。未整理の資料をよくこなした上での発言は著者独自のものとして読みごたえのあるものとなつているが、慾をいえばそれらの資料をもつと丹念に引用することによつて、資料そのものに語らせる方法を多く採用できなかつたものかとも思う。

（昭和三十五年三月刊、国語国文学研究叢書11、三二〇頁定価六二〇円、桜楓社出版）

鈴木弘道氏著
「平安末期の物語研究」

大橋清秀

鈴木弘道氏著の「平安末期物語の研究」は、

第一篇　夜半の寝覚
第二篇　浜松中納言物語
第三篇　とりかへばや物語

の三篇からなつている。これら三つの平安末期物語研究の執筆順序は、本書に収められている順序とは逆に、とりかへばや物語の研究がもつとも古いものである。昭和二十五年三月刊平安文学研究第三輯所載の「とりかへばや物語と後代文学『ちごいま』との関係―」（本書第三篇第五章第二節）がはじめであろうか。著者はこの年に立命館大学を卒業されている。すでに源氏物語の注釈書を出版していられることによつてもあきらかなように、かねてより著者は源氏物語の研究をしたいと思つていられたのであるが、源氏を理解するためには、その周辺の作品をきわめることが必要であり、たまたま未だ多くの人によつて研究されていない作品を研究することも有意義な仕事ではないかとの後藤丹治博士のすすめもあつて、卒業論文をとりかへばや物語にきめられたということである。

本書に収録されているとりかへばや物語の研究は物語の構想、物語に現れた愛情、無名草子に於ける今とりかへばや論、狭衣物語との比較、及び影響作品、外国文学との比較文学研究にわたつている。著者の実証的な真摯な研究態度は本書をつらぬいているのであるが、とりかへばや物語の研究に於ては、広く外国文学にまで及び、独自の境地を開拓されているのである。しかし勤務のかたわらの研究は時間的にも制約されざるを得ず、資料面の不如意は容易に解決することが出来ぬと考えられてか、同時代の作品である浜松中納言物語に目を転ぜられたようである。浜松中納言物語と爛柯の故事（本書第二篇第二章）、浜松・とりかへばや所載「させまろ伝説」に関する考察（本書第二篇第三章）などの研究は著者の得意とするところである。

次に夜半の寝覚・浜松中納言物語の成立順

序――作者を菅原孝標女と仮定して――（本書第二篇第一章）は浜松研究の中心をなしているのであるが、浜松天喜三年以前成立説に対する反論は（昭和三二年一〇月刊国文学第一九号所載、本書第二篇第一章第一節三(3)）、雑誌に発表された時すでに反響のあつた説得力に富む好論文である。そして著者は一、形式的方面（(1)使用語句、(2)文章、(3)所載和歌の総数）二、内容的方面（(1)夢、(2)故事・伝説、(3)官能的色彩、(4)更級日記及び両物語所載の和歌）にわたつて詳細に検討され、「寝覚・浜松には同質的現象のある反面、両物語は異なつた作者の手に成つたものではなからうかとさへ感じさせる異質的現象が見られるが、」として、寝覚・浜松の作者を孝標女と仮定して論をすすめられ、(1)寝覚は浜松よりも先の成立であること。(2)浜松は後冷泉天皇の康平二年（一〇五九）孝標女五十二歳頃以後の成立であること。(3)寝覚は後朱雀天皇の寛徳二年（一〇四五）孝標女三十八歳以後、浜松の成立期以前の創作であること。の三点を推定していられるのである。著者がすでに述べていられるように孝標女作と仮定しての推論もたしかに一つの方法であるが、更にこの問題についての著者の今後の研究の進展を期待したい。が浜松研究に於ける布石としての価値はすこしもゆるぐものではないと信ずる。

さて本書の圧巻は夜半の寝覚の研究である。著者が浜松を研究されているうちに、寝覚に及んでゆかれたことはきわめて自然なことである。本書のはじめに収められている夜半の寝覚研究史を読みすすんで行くに従つて、わたくしは二つの事柄に注目した。それは橋本佳氏編著校本夜半の寝覚と藤田徳太郎・増淵恒吉両氏編著校註夜半の寝覚の刊行と、昭和二十九年から三十年にかけて中村本が金子武雄氏の校訂によつて古典文庫から飜刻刊行されたことである。

この二つのことがなければ、著者の今日の寝覚研究は見ることが出来なかつたであろう。即ち著者の寝覚研究は校本夜半の寝覚と校註夜半の寝覚を基礎資料とし、古典文庫夜寝覚物語の刊行を契機として発展して来たものなのである。

第一章　中村本に於ける流布本中間闕巻該当部分の検討

第二章　中村本成立当時に於ける原作の形態

第三章　中村本巻五の内容と流布本との関係

第四章　中村本の改作実態に関する考察

にによつてもあきらかなように、著者の精細な研究は中村本の考察に集中していて、著者の独擅場の感があるのである。ただ論考の中に記号がたびたび出て来て、HH'となり(H)(C)と繁雑になるに従つて、論文の説得力を弱める恐れはないであろうか。著者自身が時々自分で書いていて惑うことがあるときくに及んで、これは無理なおねがいかもしれないが、附記させていただくことにした。

本書は著者のほぼ十年間の研究の成果をまとめられたものである。しかも研究生活の上からみれば、決してめぐまれた環境にあつてこれらの論考が書かれたのではない。そのほとんどが長期短期の休暇に集中的に書かれたものであるらしい。その上著者は資料面の困難を克服して、だれもが入手し得る資料にもとづいて精力的な努力をつみかさねられたのである。著者が多忙な日々にあつて、このような大著をものされたことは、わたくしのような平凡人にとつて何よりのはげましである。今更わたくしのような門外漢が述べるま

でもなく、本書の良いところも、足らざる点もすべてだれよりも著者自身が一番よく知っていられることであろう。

本書が世に出るまでの経緯については後記に書いて居られる通りであるが、わたくしは往年の立命館出版部のような出版機関が立命館大学の事業として再開されることを、この際切におねがいしたい。

わたくしは鈴木弘道氏の今日のしあわせをともによろこびとしたいのである。

A5判　四五二頁　初音書房（京都市東山区三條通白川橋東五丁目）　昭和三五年三月刊　三五〇部限定　一三〇〇円

——三五・四・二五——

堺光一君の「上田秋成」をめぐる饒舌

村田穆

作家論は恐ろしい。自分を語るに他ならぬからです。もともと、文章を書くということは、自分を語ることなのですが、就中、作家論は、その極るところと言へませう。

その作家を自分が撰ばねばならなかつた必然性、その作家との血みどろの戦ひ、そこに何を見出し、何を学びとつたかを、生々と語るところに、作家論は成り立ちませう。

近頃は、一寸した伝記書ブームの感がありますが、多くありきたりの材料と月並な見解をやりくりしただけのもののやうです。

堺君は、序説でかう書きます。「今日、現代を考える時、文学といい、思想といい混沌として迷路に踏みこんでいる。否それ以上に人間存在についての深い悩みがわれわれ全体の上を覆うている。今日ほど、真実な人間倫理そして新しい思想と文学の創造が待望されている時代はほかにないであろう。この時にあたつて、二百五十年前の危機の時代を不屈に生き抜いた秋成が、自身の苦脳と時代の危機の中で如何に自己を追求し、如何に現実を生き、如何に思想し、そして如何に文学したかということを探つてみることは意義深いことである。このような意味で秋成の人間像、思想、文学の歩みの過程を考えてゆこうと思うのである。ところで私は秋成の文学及び思想について性急な本質論を、てつとり早く語ろうというのではない。私は、まず、このような歴史の劃期であつた時代の中で、秋成の主体性としての個性が如何にして形成されていつたかを、歴史的な現実と対応させながら、事実の上から語つてゆこうと思う。そして次第に秋成の本質論におよぶこととする。」（一三頁―一四頁）

現代を二百五十年前に対比し、秋成の追求に自分の生き方を探らうとした堺君の、熱つぽい傾倒が、まづ此の書を凡百の秋成論から区別するのです。どの一節を切りぬいても、大ていは堺君の生血が噴き出すのです。

さて、本論では、第一章で、「人間としての秋成」が論じられます。彼の生涯を分つて、「Ⅰ浮浪子時代」「Ⅱ国学者時代」「Ⅲ狂蕩者時代」とし、「その大きな差異を端的